

『女大楽宝開』と中国養生書

石上阿希

中国養生書と『黄素妙論』

長生と健康を保つためには何をなすべきか。あるいはなさざるべきか。古来より東西様々な医学書がその方法や理論を説いてきた。心身に関わる諸問題のなかには当然ながら性に関わる部門もあり、特に中国の養生書に記された房中術やその思想は日本の艶本に大きな影響を与えた。

数多くある中国伝来の房中術、あるいは房中書のなかで、特に影響力が大きかったものの一つが明の嘉靖十五年（一五三六）に刊行された『素女妙論』である。ただし、艶本への直接的な影響という点で言えば、本書の抄出和訳である『黄素妙論』となる。

『素女妙論』とは、黄帝が仙女である素女に長寿の秘訣を問うという問答形式で房中の術を説いた書で、室町時代末期に松永久秀の求めに応じて医学者曲直瀬道三が『黄素妙論』として和訳したとされている^①。

本書は、黄帝素女の間答（天真論）のあと、「交合和違」、「九勢之要術」、「浅深利害損益之弁」、「八深六浅一深之論」、「五傷之法」、「淫情十動之候」、「時節善惡之弁」、「交所吉凶之弁」、「房中之薬術」、「道三之跋」と続く。ここでは男女交合の理の他、様々な体位の解説、閨房での立ち振る舞いの方法や、男女交合の際に避けねばならない事柄や日にち、閨房で用いる薬の調合など、具体的な方法が詳細に述べられている。正妻以外にも多くの女性との交わりを持っていた久秀の性生活を、道三は熟知してい

たという^②。『黄素妙論』は、そのような「久秀」という個人に向けて編まれた養生書であったが、ほどなく写本として、後には版本として広く大勢の読者に膾炙していくこととなる^③。

長澤規矩也氏は、江戸初期に刊行されたものから末期のものまで五種類を挙げており、筆者は調査によってさらに一種類を確認した^④。『黄素妙論』は江戸時代を通じて広く読まれていた書物であった。

これら六種類のなかで、最も古いものが慶長から元和期頃と推定される大本一冊で、中国人の男女が描かれた挿絵の後に、土佐風の日本画が添えられている。江戸初期にはこの復刻版二種が刊行され、しばらく時を空けて、文化五年（一八〇八）の跋文がある版本が刊行された。文化五年版は書型が中本となり、挿絵もなくなった。江戸末期にはこの復刻本が二種類刊行されている。

このように、江戸初期において『黄素妙論』は刊本として普及しているが、その過程で艶本の中へも取り込まれていく^⑤。その最も早い例が『人間楽事』であろう。柳亭種彦は、「好色本目録」の中で「春画刻本のはじめなるべし。巻の初は、ぼう内秘伝、美女良法、次に春画を載する、之は華本の翻刻なり」と記している^⑥。

同名の艶本で所在が確認できているものは二点あり、一点は国際日本文化研究センター^⑧、一点は日本浮世絵博物館に所蔵されている。内容に重なる点は多々あるものの、書型や彩色、挿絵などが異なる異本である。花咲一男氏によつて紹介された日本浮世絵博物館本（明暦元年「一六五五刊」）を見れば、その内容は種彦が述べるように、中国の春画を前半に載せ、後半には土佐派風の日本春画が載る。本文は「くわうそのめうろん」と題して『黄素妙論』の本文を利用している。先述した『黄素妙論』の刊

本を艶本として捉えるならば、種彦が『人間楽事』を「春画刻本のはじめ」とすることは誤りであるが、いずれにしても最初の艶本が房中書と深く関わっていたことがわかる。

人は何を書物に求めていたのか。製版技術の発展により、より多くの人々に知識、情報、娯楽が共有され得るという状況になったとき、まず供給されたものの一つが中国由来の「房中書」であり、「春画的挿絵」であった。そして、これらの書物が近世期を通じて豊かに展開していく春画・艶本の底流としてあったことを指摘しておきたい。

『黄素妙論』と上方艶本

時代が下るに従い、『黄素妙論』をはじめとした養生書のテキストは次第にその書名を伴わず艶本のなかに取り込まれていく。このような現象が多くみられるようになるのが、貞享〜宝永期（一六八四〜一七一）にかけてである。好色に特化した絵入百科事典的書物や浮世草子の形式・内容を踏まえた艶本など、これまで調査した限りでは、特に上方で刊行された艶本が積極的に養生書を用いている。最も利用されているのが『黄素妙論』であり、要点ごとに自在に切り取られ、艶本のテキストの中へ組み込まれていく。艶本、あるいは浮世草子を制作する者にとって、同書は自由にテキストを引き出すことができる便利な房中書のデータベース的存在となっていた。

明和期（一七六四〜一七七二）には、『黄素妙論』のテキストがしばしば教訓書・往来物に擬えて制作された艶本のなかにも現れるようになる。それらの艶本もやはり上方で制作されたものであった。

明和三年（一七六六）頃に京都で刊行された『百人一出拭紙箱』は、

書名の通り百人一首を題材とした教訓書のパロディで、恋文指南や男色心得など色道に関する多種多様な内容も含まれている。『黄素妙論』の影響がみられるのは、最終丁の一丁に載る「交開に忌べき事」で、男女交合の際に避けるべき日や場所を述べた箇所である。ただし、内容については重なる部分が多々あるが、表記の仕方は同じではなく、あるいは『黄素妙論』には記述されていない要素もあることから、直接の引用ではなく、『黄素妙論』を取り込んだ艶本や養生書などを利用した可能性が高いといえる。

一方で、『黄素妙論』の本文に大きな改変を加えず、ほぼ原文のまま引用していたのが月岡雪鼎である。この時期の雪鼎といえ、上方における艶本制作の中心であった。往来物の艶本も雪鼎やその周辺の絵師が手掛けたものがほとんどである。そしてそれらの作品にもやはり『黄素妙論』のテキストが散りばめられている。

その一つが明和五年（一七六八）頃刊『女今川おへし文』（以降『女今川』）である。本書は雪鼎の作・画とされる艶本で、女性の訓戒を説いた明和五年（一七六八）刊『女今川おしへ文』（以降『女今川』）のパロディとして作られており、版型や構成、本文などを丁寧に擬えている。⁽¹⁰⁾『女今川』は女性向けの往来物であり、その書中に女性の病気に効く薬の調合法などを記した「女妙薬療治手箱庭」という箇所がある。『女今川』はこの箇所をもじって、性交の際に用いる性薬の調合を記している。その中で、『茎大きくなす薬』として挙げている「西馬丹」の記述は、『黄素妙論』の「西馬丹」を忠実に写したものである。⁽¹¹⁾『女今川』を核として全体を構成しつつ、薬に関しては養生書を引用し、本文に嵌め込んでいるのである。

雪鼎は同様の嵌め込みを明和五年（一七六八）頃刊『女貞訓下所文庫』でも行っている。本書は明和四年（一七六七）刊『女庭御所文庫』を艶本化したものである。そのうち、「交合五傷之事」では『黄素妙論』の「五しやうのほう」を下敷きに、その内容を変えることなく、ほぼ忠実に引用している⁽¹²⁾。

養生書と『女大楽宝開』

では上記二書より先行する『女大楽宝開』（宝暦五〜七年「二七五〜五七」頃）はどうだったのかといえは、直接的に本文などに利用している部分は確認できない。しかし、男女の交わりに対する考え方には通じるものがある。

『黄素妙論』冒頭の黄帝と素女の間答をみてみよう。なぜ男女の営みが養生にとって重要なのか、黄帝からの問いに対し、素女は次のように答えている。

黄帝問ふて給はく、男女の交はり和違いかん

素女こたへて曰く、それ天地陰陽交合しては万物を生じ、男女の陰陽交はりあひては子孫を生ず、しかる間、天地の陰陽交はらざる時は、四時ならず万物生ぜず、男女の陰陽あはざる時は人倫滅して、子孫たゆる（後略）

〔一部を漢字に変えた。（ ）を用いた振り仮名の箇所〕

万物を生ずる天地の交わりと男女の交合を並列し、これを行わなければ人倫は滅してしまふと述べる。男を陽、あるいは天とし、女を陰、あ

るいは地とする考えは、古代中国の房中術の基本的な理論である陰陽五行説に基づいている⁽¹³⁾。

一方、『女大楽宝開』冒頭には各所に性的要素がちりばめられた農作図が置かれており、その上部には次のように記されている。

それ古より今にいたるまで、人をつくり又その人のたのしみとなる事此道にまさるものなし。元より色道は百姓の農作に表して、男を天とし、女を地として、男より種をおろしむるにしたがひ、地の女より子を産む也。かるがゆへに天地和合のうるほひをもつて、五穀の実ることく、段々と成長する者也。

〔一部を漢字に変えた。（ ）を用いた振り仮名の箇所〕

男女を天地に擬え、二者が交わることで子孫が繁栄することを主張する点は、『黄素妙論』と変わらない。ただし、「此道」すなわち「色道」がこれ以上ない「たのしみ」であるという箇所は雪鼎の、あるいは日本の艶本の見解があらわれたところであろう。

『女大楽宝開』を制作する時点で雪鼎が『黄素妙論』を読んでいたのかどうかを明確にすることは難しい。では、『女令川』、『女貞訓下所文庫』において『黄素妙論』の本文を利用するとき、先行する艶本から間接的に取捨選択したのはなく、『黄素妙論』から直接引用していたのだろうか。結論から言えば、その可能性は高いと考える。

雪鼎は春画を制作する際に、様々な文献を用いていることを自らの作品の中で表明している。「春宵秘戯図」と題された肉筆画帖に添付されている巻子の最後に記されている「引証書目」では、漢籍十一種と和書

四種を挙げている。艶本の類いは含まれておらず、『迷楼記』、『徐氏筆精』、『古今著聞集』などの随筆や歴史書、画論などである。¹⁵⁾ 山本ゆかり氏によれば、これらの書物には春画の由来や事例の記述が確認できる。¹⁶⁾ また、山本氏は、考証学の手法と重なるこのような故事来歴の列記によって、雪鼎が春画の正統性を歴史的に証明しようと試みていたのではないかと指摘する。

雪鼎の艶本制作の場合には、同時代の教訓書だけではなく、和漢様々な書物があり、房中術の文献として『黄素妙論』がそこに存在していた可能性も高いと考えられるのである。雪鼎は教訓書・往来物の艶本化を行うとき、書型といった外形から構成・本文・挿絵などの内部まで全体を丸々と飲み込むように取り込んでいく。典拠となる書物を通読し、換骨奪胎して艶本化する手法をみるならば、『黄素妙論』の引用も同様に原本を手元に置いて行っていたと考える方が自然ではないだろうか。

考証学を用いて春画を作り上げていた雪鼎にとって曲直瀬道三を経て中国からもたらされた『黄素妙論』は、これ以上なく春画にふさわしい房中書であったといえる。

注

(1) 天文十二年(一五四三)の奥書を有する写本や刊本もあるが、永禄十年(一五七八)に成立したという記録もあり、いずれの成立なのかについては確定できていない。

(2) 町泉寿郎「曲直瀬道三と『黄素妙論』」、『曲直瀬道三と近世日本医療社会』(武田科学振興財団、二〇一五年)所収、四〇六―四〇八頁。

(3) 同前書、四〇四―四〇八頁。

(4) 長澤規矩也『図書学参考図録 第二輯 解説』(一九七六年、汲古書院)、五一―六頁。

(5) 拙著『日本の春画・艶本研究』(平凡社、二〇一五年)、五五―八九頁。

(6) 註5、六六―八四頁。なお、註5拙著において実見することができなかった『黄素妙論養生訓』二種が近年発見され、報告されている(永塚憲治『黄素妙論養生訓』について、第一一九回日本医史学会総会、二〇一八年六月二日口頭発表)。

(7) 『新群書類従 第七 書目』(国書刊行会、一九〇六年)、一五一頁。

(8) 請求番号KC/172/S1。詳細については別稿で述べる予定である。

(9) 花咲一男「丹緑本 人間楽事」『咲くやこの花』(太平書屋、一九九九年)所収、二九二―二九四頁。

(10) アンドリュウ・ガーストル『近世艶本資料集成IV 月岡雪鼎・1 女令川おへし文』(国際日本文化研究センター、二〇〇七年)。

(11) 『女令川おへし文』は、ホルル美術館レイコレクション蔵本(2008.0413)を参照。

(12) 国際日本文化研究センター蔵本(KC/172/S1)を参照。

(13) 天理大学附属図書館本(499-1-13)。

(14) 劉達臨『中国性愛文化』(鈴木博訳、青土社、二〇〇三年)、五〇七―五〇八頁。

(15) この他に、『俗考』、『癸辛雜識』、『丹鉛総録』、『清河書画舫』、『留青日札』、『路史』、『五雜俎』、『寄園寄所寄』、『大中よしのふ集』、『源氏うき舟乃巻』、『玄旨衆妙集』。

(16) 山本ゆかり『上方風俗画の研究』(藝華書院、二〇一〇年)、一七三頁。